

古代アメリカ学会第11回東日本部会研究懇談会のお知らせ
「古代アメリカの文化遺産」

第11回東日本部会研究懇談会を以下の要領で開催します。ふるってご参加下さい。非会員の方も参加できますので、関心をお持ちの方にはぜひお声をおかけ下さい。参加の事前登録は必要ありません。

〔研究懇談会概要〕

「古代アメリカの文化遺産」と題した今回の研究懇談会では、中南米にて学芸員活動や保存修復を通じて、文化遺産の諸問題に向き合った経歴を持つ、2名の会員を発表者に迎えます。研究発表の一つは南米チリとペルーの博物館、もう一つは中米メキシコの歴史教科書を手がかりとした論考となります。文化遺産という主題に即してコメンテーターを招き、このテーマについての議論を広げたいと思います。

〔日時〕 2019年6月23日（日） 13：00-16：50

- ・ 開会あいさつ 13:30
- ・ 発表1 13:35～14:35
- ・ コメントおよび質疑応答（30分）
- ・ 小休憩（15分）
- ・ 発表2 15:20～16:20
- ・ コメントおよび質疑応答（30分、16:50終了予定）

発表1 「アンデスにおける地方博物館とその課題：サン・ペドロ・デ・アタカマ（チリ）とアンコン（ペルー）での活動事例から」

【発表者】 市木尚利（立命館大学非常勤講師）

【コメンテーター】 大貫良夫（東京大学名誉教授、野外民族博物館リトルワールド館長、クントゥル・ワシ博物館館長）

【概要】

現在、博物館では、「持続可能な開発目標（SDGs）」について考え、実践していくきっかけとなる活動が重視され、非常に大切なものになっている。歴史的に振り返ると、博物館は文明化の過程で発展し、文明化された国民（民族）を視覚化する装置として普及していった。日本では岩倉使節団によって、博物館の役割が十分理解されていた。しかし、近代的な、国民間・個人間の優劣・差別化を進めていく役割から脱却していくことが、現在の博物館に求められるものの一つになっていると考えられる。地域史が具体化していく中で、各地域の社会的コンテクストに応じた活動が必要とされている。そのことが、サン・ペドロ・デ・アタカマ考古学博物館（チリ）やアンコン遺跡博物館（ペルー）での活動

から垣間見ることができる。課題も多いが、これからの博物館のあり方を考える手がかりが数多くある。それらを明らかにしながら、今後の課題や展望を共有することが、本報告の目的となる。

発表2 「現代メキシコ人の先スペイン期遺跡観とその形成過程に影響を与えた歴史的社会的背景（仮）」

【発表者】 渡辺裕木（国立民族学博物館外来研究員）

【コメンテーター】 松田陽（東京大学大学院人文社会系研究科・文化資源学研究専攻・准教授）

【概要】

本研究の課題の核心は、メキシコ国民にとって自国の先スペイン期遺跡や遺構が、「いかなる意味や価値を持つのか」という「問い」である。考古遺産の開発および活用が多様化する今日のメキシコにおいて、遺跡の保存や一般公開の目的および方法の検討の反復は、遺産保護の観点において重要である。本研究で理解を目指すメキシコ国民の「遺跡観」は、今後の遺跡保存の方向性の決定に大きな影響力を持つと共に、展示をより有益に企画するに資すると考える。本発表では、1920年代から1990年代の間にメキシコ合衆国で出版され、初等・中等教育の現場で使用された歴史教科書の画像を精査し、各教科書で取り上げられた遺跡や遺構の分類と、教科書が作成された時代の社会的背景および、画像の引用元である書物がいかなる学術的、社会的背景のもと出版されたかを分析し、20世紀のメキシコ初等・中等教育において、先スペイン期文化がどのように紹介されていたかを考察する。

〔会場〕：東京大学本郷キャンパス総合研究博物館7階ミュージズホール

<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/information/map.html>

- 休館中につき博物館の正面玄関は閉まっておりますので、建物南東側の通用口にお越し下さい。開始時間を過ぎてからのご到着の場合、通用口に掲示した指示に従って入館してください。
- 通用口から入ったのち、階段の左側のエレベーターで7階にお越し下さい。階段の右側のエレベーターは6階までしか上がりません。

〔主催〕 古代アメリカ学会

〔連絡先〕 東日本部会幹事・鶴見英成 et*um.u-tokyo.ac.jp

古代アメリカ学会事務局 jssaa*sa.rwx.jp

（上記アドレスの*を@に換えて下さい）